

## まとめと今後について

形井秀一

日本の鍼灸はどこへ行くのであろうか。

どこに問題があるのだろうか。今後の課題は何であらうか。その課題に如何に我々は答えることができるのであろうか。

これらは、問うは安く、答えるは難しい。

社会鍼灸学研究2006の各演者の発表内容と討論は、その回答にいささかでも肉薄できたであらうか。

本雑誌は、2006年7月17日に開催した第1回社会鍼灸学研究会の発表内容の報告書である。当日の記録のテープ起こしに加筆いただいたものと、論文として書き直していただいたものの両方がある。

後藤先生には、鍼灸の可能性を大いに示して頂き、第1回目の会に大きな夢を与えて頂いた。しかし、その後発表された小川先生の過去4回のアンケート調査の系統的な検討からは、鍼灸の決して楽観できない現状があぶり出されているし、芦野先生の指摘する鍼灸が抱える歴史的な問題と箕輪先生の報告する調査結果も、鍼灸をじっくり分析し直す必要があることを物語っている。その意味では、奥宮先生が福岡裁判の意味を論理的に冷静に分析される姿勢と論の展開の仕方は、我々が学ぶべきこと大であった。このように、第1回の研究会では、法的な問題、鍼灸臨床分野の変遷と現状、そして、福岡裁判の意味するところをご講演頂き、討論した。その結果、多くの問題が提起された。

今後はこれらの問題を何年かかけて、検討していくことになる。

まずは、手始めに、1998年の福岡裁判により急増した鍼灸学校や生徒、ひいては臨床家の数が、果たして鍼灸界の質の向上に繋がってくるのかという問いを提出し、2007年の課題としたいと考えている。それには、福岡裁判により鍼灸教育界がどのような変化を来したのかを分析したいと考え、江戸期からの日本の鍼灸教育の変遷を辿ってみるつもりである。そこから、今後の鍼灸の将来像が見えてくる事を期待している。